

オセアニア[NZ]



1 農・畜産業の概況

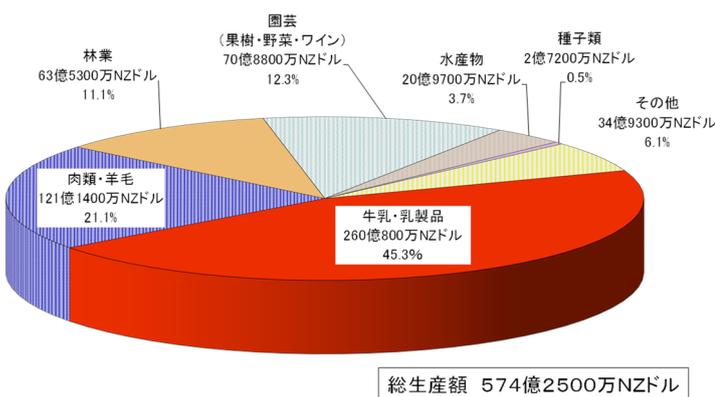
ニュージーランド（NZ）は、国土面積（2680万ヘクタール）の4割強に当たる1126万ヘクタールが農地となる農業国である。また、人口は535万人（2024年9月末時点：推計値）と、農業生産に対して国内の市場規模が小さいため、農畜産業は輸出に依存する割合が高くなっている。総輸出額に占める農畜産物輸出額（FOB^{注1}）の割合は約5割となり、外貨獲得上、重要な地位にある。

このうち、畜産部門は、農林水産業粗生産額の6割以上、農畜産物輸出額の7割以上を占め、特に牛乳・乳製品は4割以上を占めるなど基幹部門となっている。

2022/23年度（7月～翌6月）の農林水産業粗生産額は、574億2500万NZドル（前年度比8.2%増）とかなりの程度増加した（図1）。

（注1）FOB価格：リスク移転時（船上に貨物が置かれた時点）までのコストで、運賃や保険料は含まれない。

図1 農林水産業粗生産額（2022/23年度）



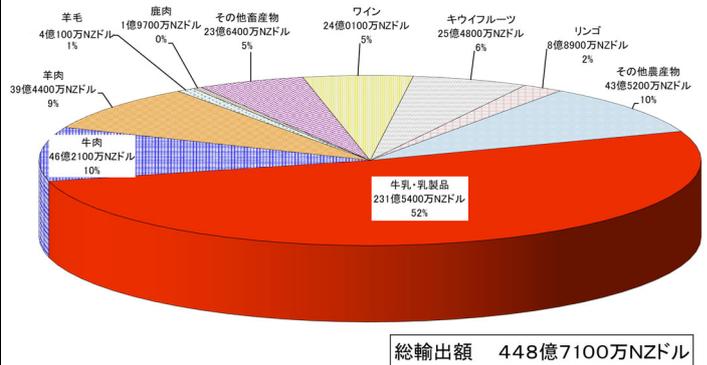
資料：NZ一次産業省「Situation and Outlook for Primary Industries」
注：年度は7月～翌6月。

このうち、牛乳・乳製品は、チーズなどの高付加価値商品の輸出量が増加したことで、260億800万NZドル（同18.2%増）と大幅に増加した。また、肉類・

羊毛については、世界的な生活費高騰による家計への圧迫により消費者がより安価な肉に切り替えたことなどから、121億1400万NZドル（同1.6%減）とわずかに減少した。果樹・野菜は、サイクロンによる洪水の影響を大きく受けたリンゴなどの収穫量は減少したもののワインの生産は好調だったことなどから、70億8800万NZドル（同4.5%増）とやや増加した。

また、22/23年度（7月～翌6月）の農畜産物輸出額（FOB）は、448億7100万NZドル（同9.2%増）とかなりの程度増加した（図2）。

図2 農畜産物輸出額（2022/23年度）



資料：BLNZ「Compendium of New Zealand Farm Facts」
注1：年度は7月～翌6月。
注2：林業および水産業を除く。

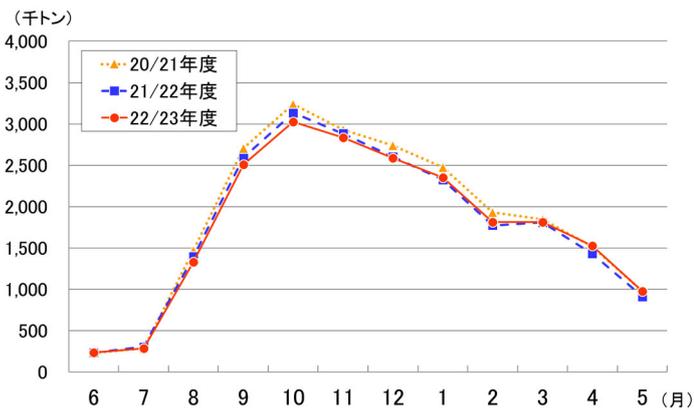
品目別では、牛乳・乳製品の輸出額は、（1）チーズなどの高付加価値商品の輸出量が増加したこと、（2）為替相場が米ドル高NZドル安で推移したこと、（3）21/22年度に高値で契約された先物商品が22/23年度に出荷されたことなどから、231億5400万NZドル（同17.5%増）と過去最高を記録した。また、やや価格が高い食肉に対する需要は弱まったことで、羊肉（ラム・マトン）の輸出額は39億4400万NZドル（同8.3%減）となった。牛肉は46億2100万NZドル（同0.9%増）とわずかに増加した。

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

NZの酪農は、温暖で降水量に恵まれた自然条件を生かし、草地を最大限に利用した放牧中心の飼養形態である。このため、生乳生産は、牧草の生育状況と密接に連動している。一般的には早春の8月頃に搾乳を開始し、10月から初夏となる12月に生乳生産の最盛期を迎え、冬となる翌年6～7月頃にはほとんどの搾乳牛が乾乳し、分娩に備えるという、明確な季節型の生産体系となっている(図3)。そのため、生乳生産の中心となる9月～翌2月の半年間で、年間生産量の約7割を生産する。

図3 生乳生産量の推移



資料：Dairy Companies Association of New Zealand
注：年度は6月～翌5月。

NZの生乳生産量は全世界の約3%にしか過ぎないが、世界最大の乳製品輸出国であり、生乳生産量の9割以上が輸出用に仕向けられる。特に全粉乳については、国際市場における貿易量の約6割を占めている。しかし、国内市場の規模が小さいため、生産者支払乳価や乳製品価格は、いずれも国際市場の影響を強く受けやすい特徴を有している。

① 主要な政策

酪農・乳業に対する国内の価格支持政策は存在しない。2001年9月まで、ニュージーランド・デイリーボード(NZDB)が乳製品の一元輸出機能を有していたが、

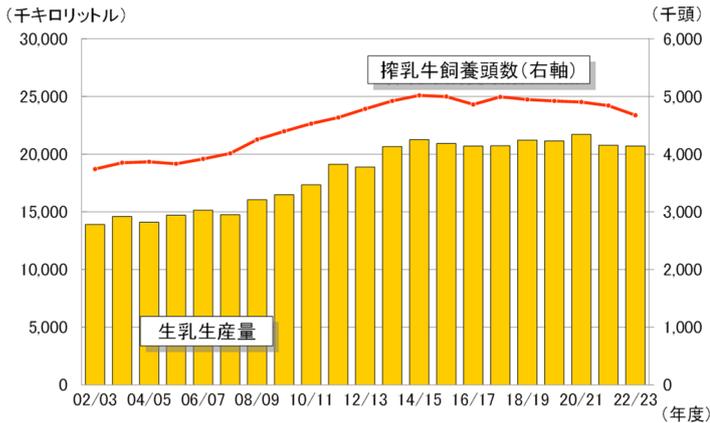
酪農産業の再編が行われ、同年10月、キウイとNZデイリー・グループの2大酪農協とNZDBの販売機能を取り込んだ巨大酪農協(乳業も兼ねる)であるフォンテラが誕生した。

フォンテラ(当時の国内集乳量の割合は96%)の誕生に合わせて、01年に生乳および乳製品市場での競争の促進を目的とした酪農産業再編法(Dairy Industry Restructuring Act 2001)が成立した。同法では、フォンテラの独占による弊害を回避するため、乳業の新規参入機会の付与などが盛り込まれたほか、集乳の義務や他の乳業会社の求めに応じた一定量の生乳供給が義務付けられていた。しかし、この20年間でフォンテラの集乳量の割合が約8割程度にまで低下していることを背景に、20年7月、一定条件のもとで集乳の義務を免除するなどの法改正が行われ、23年6月から施行された。

② 生乳の生産動向

搾乳牛の飼養頭数は、酪農産業の再編による競争力の向上や国際的な乳製品需要の増加、さらに、羊・肉用牛部門から収益性に勝る酪農部門への転換などを受け、増加傾向で推移してきた。ただし、2015/16年度からは、乳製品国際価格の低迷に伴い淘汰が進んだことで、搾乳牛飼養頭数は2年連続で減少した(図4)。17/18年度には乳製品国際価格が回復したことで増加に転じたものの、18/19年度に再び減少に転じた。以降、同国の搾乳牛飼養頭数は、飼養戸数の減少などを背景に5年連続で減少しており、22/23年度は467万5000頭(前年度比3.5%減)とやや減少した。

図4 生乳生産量と搾乳牛飼養頭数の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」
 注1：年度は6月～翌5月。
 注2：搾乳牛飼養頭数は、各年12月末時点。

また、NZの酪農は、降水量に恵まれた北島のワイカト地域を中心に行われてきた。しかし、近年は、人口が少なく草地面積が確保できる南島のカンタベリー地域などでかんがい施設が整備されたことから、南島の飼養頭数が拡大しており、両島の差は縮小傾向にある。22/23年度の搾乳牛飼養頭数は、従来からの主産地である北島が268万3000頭(同3.9%減)とやや、新興の酪農生産地である南島が199万2000頭(同2.8%減)とわずかに、いずれも前年度から減少した(表1)。

表1 島別の搾乳牛飼養頭数・飼養戸数・1戸当たり飼養頭数の推移と1頭当たりの生乳生産量

地域・区分/年度		2018/19	19/20	20/21	21/22	22/23
北島	飼養頭数(千頭)	2,891	2,857	2,839	2,793	2,683
	飼養戸数(戸)	8,156	7,979	7,845	7,632	7,444
	1戸当たり飼養頭数(頭)	354	358	362	366	432
南島	飼養頭数(千頭)	2,056	2,064	2,065	2,049	1,992
	飼養戸数(戸)	3,216	3,200	3,189	3,164	3,157
	1戸当たり飼養頭数(頭)	639	645	647	647	587
合計	飼養頭数(千頭)	4,946	4,922	4,904	4,842	4,675
	飼養戸数(戸)	11,372	11,179	11,034	10,796	10,601
	1戸当たりの生乳生産量(リットル)	4290	4296	4426	4291	4351

資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」
 注1：各年12月末時点。
 注2：搾乳牛の頭数および戸数。

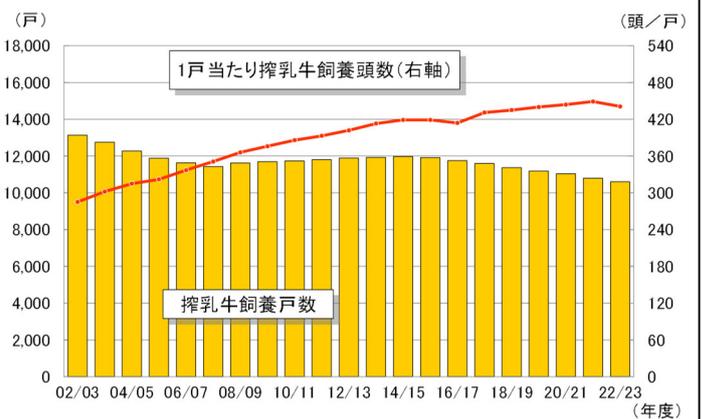
生乳生産量の長期的な推移を見ると、14/15年度までは搾乳牛頭数の増加に加え、補助飼料の給餌量増加を受けて1頭当たり乳量が増加したことなどから、右肩上がりで推移してきた(図4)。しかし、乳製品国際相場の低迷を受けて、生産者支払乳価が引き下げら

れたことで生産者の生産意欲が減退し、搾乳牛頭数が減少したことなどから、15/16年度から2年連続で前年度を下回った。18/19年度は春先の気候に恵まれて、牧草地の生育が良好であったことから生乳生産量は増加した。また、20/21年度は、好天に恵まれ、牧草の生育が良好であったことなどから、2170万5000キロリットルと過去最高を記録した。一方、22/23年度は、悪天候の影響を受けて年度前半の生乳生産は振るわなかったものの、後半は断続的な降雨と気温の上昇により牧草の生育が順調に進んだことから、全体では2070万2000キロリットル(同0.4%減)とわずかに減少した。

搾乳牛飼養戸数は、07年に乳製品国際価格が高騰して以降、14/15年度まで8年連続で増加したが、15/16年度以降は減少傾向に転じている。22/23年度は1万601戸(同1.8%減)と8年連続の減少となった(図5)。

1戸当たり搾乳牛飼養頭数は、酪農家の規模拡大に伴い、これまで一貫して増加してきた。16/17年度には生産者支払乳価の低迷などを背景に減少したものの、17/18年度には再び増加に転じた。しかし、22/23年度は441頭(同1.8%減)と6年ぶりの減少となった。

図5 搾乳牛飼養戸数と1戸当たり搾乳牛飼養頭数の推移



資料：Dairy NZ「Dairy Statistics」
 注：各年12月末時点。



写真1 かんがい酪農の風景(南島:カンタベリー地方)

③ 牛乳・乳製品の需給動向

NZの乳製品輸出先は、中国をはじめ、東南アジア、中東、北アフリカ、EU、北米など世界130の国や地域に及んでいる。

22/23年度(7月～翌6月)の乳製品主要4品目(全粉乳、バター、脱脂粉乳、チーズ)の輸出量は、265万6000トン(前年度比7.9%増)とかなりの程度増加した(表2)。品目別に見ると、全粉乳は、最大の輸出先である中国向けの減少などから137万4000トン(同2.3%減)とわずかに減少した。一方、バターは、主要輸出先である豪州向けに加えてメキシコ向けが、チーズは主要輸出先である日本や豪州向けが、いずれも増加した。脱脂粉乳は、主要輸出先である中国やインドネシア向けが大幅に増加したことで43万6000トン(同32.5%増)と前年を大幅に上回った。

表2 搾乳牛飼養頭数、生乳生産量および乳製品輸出量の推移

(単位:千頭、千キロリットル、千トン)

区分/年度	2018/19	19/20	20/21	21/22	22/23	
搾乳牛飼養頭数	4,946	4,922	4,904	4,842	4,675	
生乳生産量	21,217	21,145	21,705	20,776	20,702	
輸出量	全粉乳	1,506	1,497	1,640	1,407	1,374
	バター	466	438	416	394	473
	脱脂粉乳	372	374	328	329	436
	チーズ	333	323	360	332	373
	合計	2,677	2,632	2,744	2,462	2,656

資料: Dairy NZ「Dairy Statistics」、Statistics NZ
 注1: 経産牛飼養頭数は12月末時点、単位は千頭。
 注2: 生乳生産量は6月～翌5月、単位は千キロリットル。
 注3: 乳製品輸出量は7月～翌6月、単位は千トン。

④ 生産者乳価と生産コストの動向

同国の生産者乳価は、国内の乳製品市場が小さく輸出

依存度が高いことから、国際的な価格動向や為替相場の動向などに左右される傾向にある。

2022/23年度(6月～翌5月)の生産者支払乳価(平均支払乳価)は、生乳の固形分^(注2)1キログラム当たり9.26NZドル(前年度比2.7%減)となった(図6)。

生産コストは、14/15年度および15/16年度は、乳価の低迷により、生産者が補助飼料の給餌やかんがい施設への投資などを抑制したことから低下した。2000年代後半に入り、乳価の上昇に伴い生産者の生乳増産意欲が高まり、放牧中心の低コスト生産が特徴のNZ酪農でも補助飼料の給餌量が増加したことに加え、インフレ圧力による飼料費や肥料費、燃料費などの高騰を受けて、微増傾向で推移している。22/23年度の生乳の固形分1キログラム当たりの同コストは5.75NZドル(同8.1%増)とかなりの程度増加した。

(注2) 乳脂肪分および乳タンパク質。

図6 生産者乳価と生産コストの推移



資料: Dairy NZ「Dairy Statistics」、 「Economic Survey」

注1: 年度は6月～翌5月。

注2: 生乳の固形分ベース。

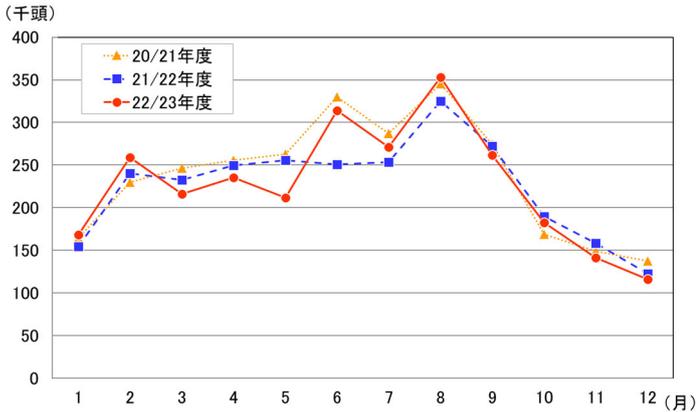
(2) 肉牛・牛肉産業

NZの肉用牛生産は、酪農と同じく放牧(草地)に依存した生産体系となっており、フィードロットなど穀物肥育による生産は、ごくわずかである。また、酪農部門からの牛の供給が多いことで、牛肉生産が酪農の動向と密接に連動していることが、NZの肉牛・牛肉産業の特徴の一つである。

年間の成牛と畜頭数の推移を見ると、肉用牛のと畜頭数は牧草の生育が良好な春(9～11月)を過ぎた夏

(12月～翌2月)ごろから増加し、冬(6～8月)ごろにピークを迎えた後、また春にかけて減少する(図7)。また、と畜頭数全体の4割程度を占める経産牛は、大部分が乳用経産牛由来であり、酪農の乾乳期となる6月を前に乳用牛の更新が行われることから、例年4～5月に経産牛のと畜頭数が集中する。

図7 成牛と畜頭数の推移



資料: Statistics NZ
注: 年度は10月～翌9月。



写真2 肉牛の放牧風景(北島)

また、肉用牛として飼養される牛の約4分の1は、乳用種または交雑種(乳用種×肉用種)である。酪農部門から供給される乳用種のうち、経産牛は加工用牛肉(ひき材用)として、主に米国を中心に輸出されている。また雄子牛は、一部は肥育に回されるものの、多くが生後1カ月以内でと畜され、主にビーフフードやペットフードの原料に仕向けられる。

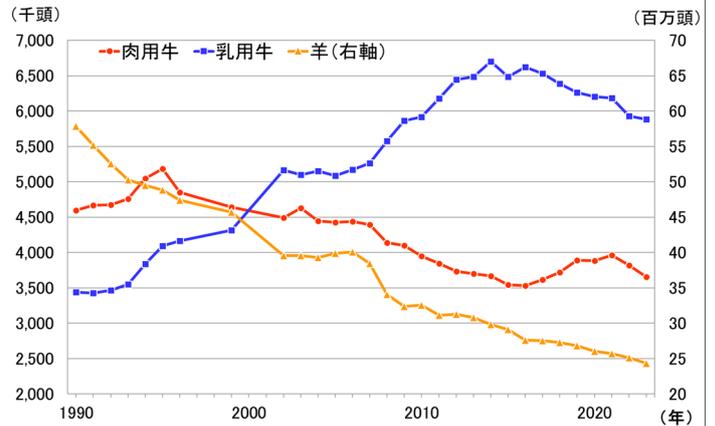
NZの牛肉産業は、国内の市場規模が小さいことから酪農産業と同様に輸出依存度が高く、生産された牛肉の7割程度(製品重量ベース)が輸出に仕向けられている。このため、肉牛・牛肉産業も、国際市場の影響を強く受

ける傾向にある。

① 肉用牛の飼養動向

肉用牛の飼養頭数の推移を長期的に見ると、収益性の悪化による経営規模の縮小や、酪農や林業など、より収益性の高い部門への転換などにより、1995年の518万頭をピークに右肩下がりとなっており、2000年には右肩上がりで増加している乳用牛と逆転した(図8)。その後、肉用牛飼養頭数は16年まで減少傾向が続いたが、17年には牛肉価格が好調であったことから増加に転じ乳用牛とは反対に増加傾向で推移していた。しかし、21年以降は再び減少となった。

図8 主要家畜の飼養頭数の推移



資料: Statistics NZ
注: 各年6月末時点。

23年6月末時点の肉用牛飼養頭数は、365万4000頭(前年比4.4%減)と前年をやや下回り、直近5年間の平均飼養頭数(385万6000頭)も下回った(表3)。

表3 肉用牛飼養頭数の推移

(単位: 千頭)

区分/年	2019	20	21	22	23
肉用牛	3,890	3,883	3,965	3,821	3,654
うち繁殖雌牛	1,105	1,067	1,067	1,021	989

資料: Statistics NZ
注: 各年6月末時点。

② 牛肉の需給動向

ア 生産動向

牛肉生産量の長期的な推移を見ると、2000年代

前半まではおおむね増加傾向にあったが、その後は飼養頭数の減少とともに減少傾向が続いていた。

18/19年度には、中国をはじめとするアジアからの旺盛な需要とNZドルの下落により牛肉輸出価格が記録的な高値となったことで、わずかに増加した(表4)。その後も、高水準で推移する牛肉価格を追い風に、牛肉生産量は増加基調を維持し、20/21年度まで4年連続で増加した。21/22年度は、飼養頭数の減少などを背景にやや減少した。22/23年度は、為替相場が米ドルに対してNZドル安で推移したことで輸出に有利に働き、と畜頭数が増加したことや、食肉処理施設の労働力不足が緩和したことなどから、70万9000トン(同2.4%増)とわずかに増加した。

イ 輸出動向

2022/23年度の牛肉輸出量は、牛肉生産量の増加に伴い、49万6000トン(同3.3%増)とやや増加した(表4)。

輸出先別に見ると、最大の輸出先である中国向けは20万3345トン(同7.5%減)とかなりの程度減少した。一方で、輸出先第2位の米国向けは16万6481トン(同33.4%増)と大幅に増加した。これは米国国内で牛群再構築が進む中、同国向けは冷凍品を中心に大幅に増加したことが背景にある。

表4 牛肉需給の推移

区分/年度	2018/19	19/20	20/21	21/22	22/23
成牛と畜頭数(千頭)	2,631	2,688	2,852	2,705	2,732
子牛と畜頭数(千頭)	1,816	1,903	1,887	1,873	1,958
牛肉生産量(千トン)	667	682	729	693	709
子牛肉生産量(千トン)	29	30	30	30	31
牛肉輸出量(千トン)	453	464	504	480	496

資料：Statistics NZ、BLNZ「New season outlook 2023-2024」

注1：年度は10月～翌9月。

注2：生産量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース。

③ 輸出向け肉用牛価格の動向

NZでは、生産された牛肉の7割程度(製品重量ベース)が輸出に仕向けられることから、同国の肉用牛価格は、輸出先の経済状況のほか、為替相場にも左右される傾向がある。

輸出向け肉用牛の生産者手取価格(と畜場出荷価格)は、中国などアジアからの牛肉需要が顕著であることから、2010/11年度以降、比較的高い水準を維持していた。18/19年度以降は下落傾向を示していたが、21/22年度は牛肉輸出価格の高騰に後押しされて高い水準となった。

22/23年度は、牛肉輸出価格が振るわなかったことから、1頭当たり1386NZドル(前年度比2.5%安)とわずかに下落した(表5)。

表5 輸出用肉用牛の1頭当たり手取価格の推移

(単位：NZドル/頭)

区分/年度	2018/19	19/20	20/21	21/22	22/23
生産者手取価格	1,223	1,222	1,207	1,421	1,386

資料：BLNZ「Compendium of New Zealand Farm Facts」

注1：年度は10月～翌9月。

注2：皮革を含む。